**〔解　説〕**宝暦元年（一七五一）十二月、豊竹座初演。並木宗輔(千柳)・浅田一鳥・浪岡鯨児(なみおかげいじ)・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛(あつもり)最期と忠度(ただのり)都落を中心に脚色したもの。三段目までは並木宗輔が書きましたが、この段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させました。

**〔ここまでのあらすじ〕**源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「一枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣します。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをし、後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋へ連れ帰ります。その後、平家の陣から大将敦盛が現れ、熊谷は敦盛を追って、須磨浦で敦盛を討ち取ります。

**〔熊谷桜の段　あらすじ〕**須磨にある熊谷直実の陣屋には、若木の桜の傍らに例の制札が立てられており、通りすがりの人々が制札を見て話をしています。そこへ熊谷の妻相模が、小次郎の初陣を案じてやってきて、家来の堤軍次が出迎えます。さらに敦盛の母、藤の方が人に追われてに陣屋に駆け込んできます。相模は昔、藤の方に仕えていた頃、佐竹次郎いう警固の侍と恋仲になり、処罰されるところを藤の方に助けられたという恩がありました。佐竹次郎が熊谷であると知った藤の方は、わが子敦盛の仇として熊谷を討たせよと相模に詰め寄ります。相模が宥めているところへ、梶原景高が石屋の弥陀六を縛って連れてきたので、相模と藤の方は別間へ隠れます。

梶原は、敦盛の石塔を建てたことについて弥陀六を詮議しますが、弥陀六は動じません。外出している熊谷が帰ってきてからにしようと、梶原は弥陀六を引っ立てて奥へと入ります。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。　　　　　　　　　　　　　(一般社団法人　義太夫協会発行)

**熊谷桜の段**

　行く空も、いつかは冴えん須磨の月。平家は八島の浪に漂ひ、源氏は、花の盛りを見る中に勝れて熊谷が、陣所は須磨に一構へ、要害厳しき、逆茂木の中に若木の花盛り、八重九重も及びなき、それかあらぬか人毎に、熊谷桜といふぞかし。花折らせじとの制札を読んで行く人読めぬ人。一つどころに立集り、

「さても咲いたり〳〵。花より見事なこの制札、弁慶殿の筆ぢゃげな。さっても見事ア一つも読めぬ」

「ヲヽあれはの、義経殿がこの花を惜み、一枝切らば指一本切るべしとの法度書」

「ヤア花の代りに指切ろとは、首切る下地ヲヽこはや。見てゐる中も虎の尾を踏む心地する皆ござれ」

と、花に嵐の臆病風ちり〳〵にこそ別れ行く。

はる〴〵と、尋ねてこゝへ熊谷が妻の相模は子を思ひ夫思ひの旅姿、陣屋の軒をこゝやかしこと尋ねしが、幕に覚えの家の紋。

「嬉しやこゝ」

と内に入る。折節家の子堤の軍次立出でて、

「これは〳〵奥様か」

「ヲヽ軍次そなたも息災さうな。マアめでたいめでたい。熊谷殿や小次郎も変ることはないかの。早う逢はせてたも」

「ハイ旦那は今日御廟参。小次郎様は先頃より御前勤めで御下りなし。マア〳〵長の御旅路お疲れをお休め」

と、挨拶とり〴〵なるところへ、敦盛卿の御母藤の局虎口の難を遁れ来て、こけつ転びつ花の蔭、陣屋をめがけ走着き、

「跡より追手のかゝる者影を隠して給はれ」

と、険しき体に驚きて相模は傍へ走り寄り、見るに見かはす互ひの顔。

「ヤアお前は藤のお局様ではないか」

「さういやるそなたは相模ぢゃないか。テモ久しやなつかしや」

「おゆかし様や」

と手を取って

「マアこなたヘ」

と伴ひ入る、親しき体に心を利かし軍次は勝手へ入りにけり。相模はやがて手をつかへ、

「誠に一昔は夢と申すが、大内に御座遊ばす時、勤番の武士佐竹次郎殿と馴染め、御所を抜出で東へ下り、お前様のお身の上を承れば、御懐胎のお身ながら平家の御家門、参議経盛様方へ縁づき給ふとの噂、その折は世盛りの平家、御威勢は益々と蔭ながら悦びましたに、この度源平の戦ひ。御一門もちり〴〵と聞くにつけ、アヽこの藤の方様はなんとなされたどう遊ばしたと、一人苦にしてをりましたに、マア御機嫌なお顔を見て、おめでたやお嬉しや」

「ヲヽそなたも無事でマア嬉しい。懐胎で出やった時の子は姫ごぜか男の子か。息災で育ってゐるか」

と、ちょっと寄っても女子問うつ問はれつ年月に、積る言の葉繰返し嬉し涙の種ぞかし。藤の方涙ぐみ

「世の盛衰は是非もなや。その時産落したは無官の太夫敦盛とて、器量発明揃うた子を、こんどの軍に討死させ、夫は八島の波に漂ひ、我のみ残る憂き難儀浅ましの身の上」

とかこち給へば、

「お道理〳〵。以前の御恩もあり、連合ひにも語りお身の片付後世の営み、お心任せに致しませう。以前は佐竹次郎と申して、北面同然の武士只今にては、武蔵国の住人私の党の籏頭、熊谷次郎直実と人も知った侍」

と、聞くより御台は、

「ヤアそなたの連合ひの佐竹次郎、今では熊谷次郎といふか」

「アイ」

「スリャアノ熊谷次郎はそなたの夫よな。ハア」

はっと吐胸の気をしづめ、

「なんと相模。以前大内にて不義顕はれ、佐竹次郎と諸共禁獄させよとの院宣。自が申宥め御所の御門を、夜の内に落してやったを覚えてか」

「アッアその時の御恩、なんの忘れませうぞいな」

「ムヽその恩を忘れずば、助太刀してそちが夫熊谷を自に討たしてたも」

「エヽイそりゃ又何のお恨みで」

「サア最前も話した院の御所のお胤、無官の太夫敦盛をそちが夫、熊谷が討ったわいの」

「エヽそりゃまあ誠でござりますか」

「ムヽスリャそなたは何にも知らぬか」

「サアはる〴〵と東より、今来て今の物語、聞いて吐胸の誠しからず追付け夫が帰り次第、様子を尋ぬるその間暫くお控へ下され」

と、詞を尽し理を尽し、宥むる折に表より、

「梶原平次景高所用あって推参」

と、呼ばはる声。

「ヤアなに梶原とや、見付けられては御身の大事。まづ〳〵こちヘ」

と御台の手を取り一間へ伴ひ入りにける。程もあらせず入来る梶原平次景高。我慢に募る横柄顔。挨拶もなく座に付けば、堤の軍次立出で、

「今日は主人直実志あって廟参。御用あらば某に仰せ置かれ下され」

と、地に鼻付くれば平次景高。

「ナニ熊谷殿は他行とな。ソレ家来ども。その石屋の親仁め引立て来れ」

「ハッ」

と答へて科もなき白毫の弥陀六を、平次が前に引据ゆれば、

「ヤイなまくら親仁め、おのれ何者に頼まれ、敦盛が石塔は建てたやい。平家は残らず西海へぼっくだし、誂ゆべき相手なければ、察するところ源氏の二股武士が、頼みしに違ひはあるまい。サア真直に白状ひろげ、偽ると鉛の熱湯、脊骨を割って流し込む」

と、おどしかけても正直一遍。

「テモさても御無理な御詮議。先程も申した通り石塔のは敦盛の幽霊。五輪のことはさておき一厘も手附は取らず、建つるとそのまゝ石塔の喰逃げ。せめて人魂でも手附に取ったら、小提灯の代りにいたしませうに、冥途へ書出はやられず、本のこれが損しゃう菩提。有りやうの申上げ願以此功徳施一切。かくの通りでござりまする」

と取じめなき、

「アヽ何おっしゃっても糠に釘」

と、軍次が詞に平次は悪智恵。

「大かた石塔を建てさせたわろも合点々々。熊谷戻らば三つの詮議。まづそやつめを引立て来れ」

と、一間へ入れば家来ども、石屋の親仁をむりやりに引立て